

〈論 文〉

「～てくれる」「～てあげる」の誤用について

— 韓国人日本語学習者を対象に —

金 賢 珠

キーワード：授受補助動詞，視点，受け手，与え手，レベル別

はじめに

韓国語と日本語は文法が類似していることから韓国人にとって日本語は他言語より学習しやすいと言われている。語彙を覚えて並べるだけで他言語母語話者より安易に話すことができる。そのため、ある程度学習が進むと語彙を置き換えてコミュニケーションを図る傾向もみられる。例えば、日本への旅行など趣味を目的として日本語を学ぶのであれば、面と向かって話す場で、もし間違えた日本語を使用したとしても大事に至らずに済むことも多い。しかし、学習した日本語を活用する職に就こうと思えば、日本語は韓国語と似ているからと甘い考えで臨むと場合によっては誤解を招くこともある。なぜなら、日本語と韓国語は似ているものの全く同じ言語ではなく相違点もあるからだ。例えば敬語一つをとっても、日本語は相対敬語であり、韓国語は絶対敬語である。このように似ているといっても異なる言語である日本語に対して、韓国人学習者が日本語を習得する過程で使い分けに難しさを感じる項目の一つに「くれる」「あげる」など授受動詞が挙げられる。稲熊(2004: 13)は、韓国人学習者の授受表現の習得について、日本語と韓国語はよく似ているからこそ難しい点もあり、授受表現は韓国人の日本語学習者にとっても難しい項目と言及している。韓国語には授受動詞は存在するが、話し手が発話時、話し手自身が聞き手や話題の人物との距離、つまり、誰寄りかという日本語が持っている視点性は考慮しない。また、「あげる」、「くれる」の区別がなく、「주다 (juda)ⁱ」の一つの動詞が用いられる。物の授受動詞「あげる」、「くれる」について、日本語と韓国語を比較してみると、下記のようなになる。

お菓子を <u>あげる</u>	→	과자를 <u>주다</u> ⁱⁱ
お菓子を <u>くれる</u>		

一方、補助動詞として使用する場合は、聞き手または話題の人物に対する行為や恩恵がうまれるが、ウチ・ソトⁱⁱⁱ関係に不慣れな韓国人学習者にとっては、実際の場面で困難を感じることもある。

尹 (2009) は、韓国語の授受補助表現に「視点制約」がないことについて以下のように示している。

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 내가 타로에게 책을 사 주었다 | 타로가 나에게 책을 사 주었다 |
| (1) 私が太郎に本を買ってあげた。 ○ | (2) 太郎が私に本を買ってくれた。 ○ |
| 私が太郎に本を買ってくれた。 × | 太郎が私に本を買ってあげた。 × |
- (尹 2009 より)

上記のように、韓国語「사 주었다」が日本語では、(1)「買ってあげた」と(2)「買ってくれた」の二つの表現になる。例えば、(1)の場合、「내(私)가(が) 타로(太郎)에게(に)」であり、私から太郎に恩恵が移動する意味で使用されていることから、「私が太郎に本を買ってあげた」が正用である。しかし、学習者の中には、「私が太郎に本を買ってくれた」と誤って使う人もいる。つまり、「てくれる」を使用すべきところに「てあげる」を使用したり、「てあげる」を使用すべきところに「てくれる」を使用したりするなど視点の置き方を理解していないため犯す誤用が多い。日本語母語話者が使用する授受補助動詞「てくれる」と「てあげる」が、視点を考慮しない韓国人学習者には使い分けが困難であることを示す。

そこで、本稿では、上記のような類を誤用として、授受補助動詞における話し手の視点に着目し、視点による誤りにはどのようなものがあるか明らかにすることを目的とする。

1. 先行研究と課題

1.1 先行研究

久野 (1978) は、カメラ・アングルを一次元の表す手段として、共感 (Empathy) 度という概念を導入し、視点について論じている。それによれば、文中の名詞句の x 指示対象に対する話し手の「自己同一視化」を共感 (Empathy) と呼び、その度合いを共感度、すなわち、 $E(x)$ で表わしている。共感度は、値 0 (客観描写) から値 1 (完全な同一視化) までの連続体であると説明しており、 $E(x)$ と他の共感度との大小関係を話し手に対し「視点」と名付けた。また、話し手が x よりも y の視点をとっていることを $E(y) > E(x)$ で表した。授受動詞の視点については、クレルは、「E (与格目的語) > E (主語)」, ヤルは、「E (主語) \geq E (与格目的語)」, モラウは、「E (主語) > E (非主語)」となる。また、「クレル・ヤル」が補助動詞として用いられる場合には、「テクレル」は「E (非主語) > E (主語)」, 「テヤル」は「E (主語) > E (非主語)」, すなわち、独立動詞としての「クレル・ヤル」視点制約と類似しているが、「テヤル」が、中立的な視点は持たないと論じている。

中川 (1997) は、『視点と言語行動』にて、日本語では授受 (補助) 動詞が頻繁に使用されるとし、授受補助動詞「やる」, 「あげる」, 「くれる」と視点、受益者との関係について以下の通りまとめている。

動詞 + 「やる, あげる」の視点は主語の指示対象 (ないし主語より) の人物であり, 受益者は目的語の指示対象の人物である。

動詞 + 「くれる」の視点は受益者ともに目的語の指示対象 (ないし目的語より) の人物である。

坂本・岡田 (1996) は, 日本語の授受動詞の習得について, 視点の置き方, つまり, 登場する人物の中で誰が心理的に話者に近い人物で, 誰が話者から遠い人物かを会話, 文章から正確に把握する力がどれほどついているかが正答率に大きく影響すると述べている。また, 3人以上の人物が関係している談話では, どの人物がIn-groupで, どの人物がOut-groupであるかをはっきり認識する能力が上級レベルの学習者でもまだ十分に身につけていないと報告している。

武村 (2011) では, 中国人学習者を対象とした授受動詞文理解に影響を及ぼす要因について, 授受動詞文の視点制約に違反した文には誤った判断を行う傾向があるとし, 視点制約に違反した文を正しく判断することはレベル上位群でも難しいと報告している。

尹 (2009) では, 日本語の授受動詞における本動詞と補助動詞の習得について, 授受補助動詞における誤りは, 次の①, ②のように学習環境に関わらず視点制約を破っているものが多かったと報告している。

- ① 私が友達に本を買ってくれた。(私が友達に本を買ってあげた)
- ② 太郎さんが私の荷物を持ってあげた。(太郎さんが私の荷物を持ってくれた)

1.2 研究課題

韓国人学習者にとって, 授受補助動詞の使用に誤用が多く生じる理由は, 日本語の授受補助動詞における視点の置き方を理解しないため, その授受動詞の使い分けが難しいことが考えられる。

本稿では, 韓国人日本語学習者を対象とし, 授受補助動詞における話し手の視点に着目し, 「てあげる」, 「てくれる」の視点から, 話し手の視点が与え手及び受け手のどちらにおかれるかの相違が誤用の生起に要因としてどのように関与しているかについて, 以下の2つの研究課題を立て, 追究する。そこで, 韓国人の視点の理解を知るために, 話し手の視点をさらに「話者」, 「家族」, 「家族以外」と3つに細分化し, 考察する。

課題① 授受補助動詞「てくれる」文において, 受け手の相違 (話者か, ウチの人であるか, ウチの人の場合, 家族か, 家族以外か) は誤用に関与しているか。

課題② 授受補助動詞「てあげる」文において, 与え手の相違 (話者か, ウチの人であるか, ウチの人の場合, 家族か, 家族以外か) は誤用に関与しているか。

2. 調査の概要

2.1 調査時期及び調査対象

2011年7月、日本の東京都内に所在する日本語学校及び外語専門学校で、第2言語として日本語を履修している計50名の学習者を対象にアンケート調査を実施した。27名が日本語学校学習者、23名が外語専門学校学習者である。表1は、50名の日本語レベル別にまとめたものである。

表1 日本語レベル別

日本語 レベル別	A群 26名		B群 9名		C群 15名	計
	N1	1級	N2	2級	未受験	
被験者数	17人 (5)	9人 (0)	6人 (6)	3人 (1)	15人 (15)	50人 (27)

※ () は日本語学校在学学生数

2.2 調査方法

日本語能力試験の結果に基づいて、レベル別にA群・B群・C群三つのグループ（A群は日本語能力試験N1/1級の学習者、B群はN2/2級の学習者、C群は未受験者）に分けて検証する。

調査のため、短文一つまたは二つからなる問題文の授受表現の部分を文脈に合わせて三つの選択肢から選ぶ問題（計10問）の計12問を作成した。調査対象者に、ランダムに提示した。回答は、12問中、日本語及び韓国語に訳す2問を除き、項目毎の得点を正用1点の計10点満点とし、得点化した。この得点化したデータにもとづいて、日本語力のレベルによるグループ間の誤用率を比較してみた。

3. 調査結果

調査問題のうち、「てくれる」文は、問3, 5, 7, 8, 11で、計5問である。受け手の相違によって、どの程度の割合で誤用が生じるかを調査するため、受け手を「話者」, 「家族」, 「家族以外」の三つに設定した。以下に結果を分析し、研究課題について考察を行う。

3.1 研究課題①の結果

研究課題①：授受補助動詞「てくれる」文において、受け手の相違（話者か、ウチの人であるか、ウチの人の場合、家族か、家族以外か）は誤用に関与しているか。

例1) 友だちは私に卒業アルバムを見せてくれました。 ← (受け手が話者の場合)

例2) 田中さんは私の妹にパンを焼いてくれました。 ← (受け手が家族の場合)

例3) 男の人は友達の荷物を持ってくれました。 ← (受け手が家族以外の場合)

図1は、「てくれる」文の使用の際、受け手の相違（話者，家族，家族以外）によって生じる誤用を示したものである。

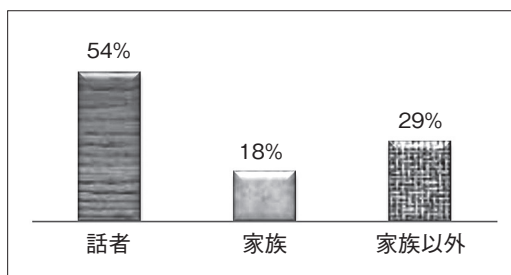


図1 「てくれる」の受け手の相違による誤用率

レベルの違いを問わず、受け手の相違によって生じる誤用を比較してみると、図1からわかるように差がみられた。誤用は、「話者」が54%、「家族以外」が29%、「家族」が18%となっている。すなわち、日本語のレベルにかかわらず「話者」の誤用率が最も高く、「家族以外」，「家族」順に下がる。これにより、受け手の相違が「てくれる」の誤用に影響を及ぼしているようである。

図2は、受け手の相違によって生じるB群（N2及び2級）の誤用を示したものである。

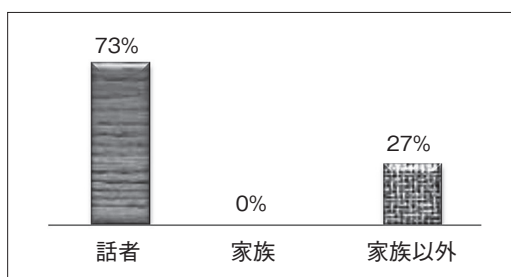


図2 受け手の相違による誤用（B群）

B群の誤用率をみると、図2でみられるように、「話者」が73%、「家族」が0%、「家族以外」が27%となっていることから、受け手の相違によって誤用率が異なっていることがわかる。最も高い割合が示された「話者」に対して「家族」では誤用が生じていない。図3は、受け手の相違によって生じるA群（N1及び1級）の誤用を示したものである。

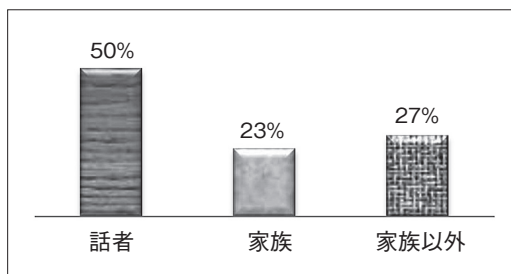


図3 受け手の相違による誤用（A群）

B群では設定した受け手の三つのうち「家族」では誤用が見られなかったが、図3からわかるようにA群では、いずれも誤用が見られた。誤用は、「話者」が50%で最も高い割合が示されている。その次に「家族以外」が27%、「家族」が23%である。ここで図2と図3を比較してみると、A群もB群も「話者」の誤用率が高いことがわかる。「家族以外」の誤用率は、B群が27%、A群が27%で、ほとんど同じであるといえるのに対して、「家族」の誤用率はレベルの高いA群がレベルの低いB群より割合が高いことがわかる。「話者」についてはA群もB群も高い誤用率が示されたもののレベルの向上とともに減っていることがわかる。

3.2 研究課題②の結果

調査問題のうち「てあげる」文は、問4、9、12で、計3問である。問題を出す際、与え手の三つの設定の中「家族」の項目が欠如されたため、ここでは、与え手の相違を「話者」と「家族以外」と二つに設定する。この節は以下の課題を分析し、考察を行う。

研究課題②：授受補助動詞「てあげる」文において、与え手の相違（話者か、ウチの人であるか、ウチの人の場合、家族か、家族以外か）は誤用に関与しているか。

- 例1) 私は友達に本を貸してあげました。 ←（与え手が話者の場合）
 例2) 妹は友達にケーキを作ってあげました。 ←（与え手が家族の場合）
 例3) キョウホウさんは張さんに傘を貸してあげました。 ←（与え手が家族以外の場合）

図4は、レベルを問わず、授受補助動詞「てあげる」文の使用の際、与え手の相違（話者、家族以外）によって生じる誤用を示したものである。

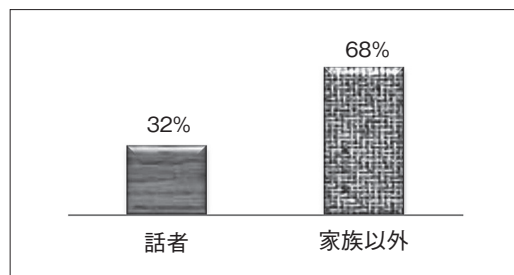


図4 「てあげる」の与え手の相違による誤用率

レベルを問わず、与え手の相違によって生じる誤用を比較してみると、図4からわかるように、誤用率は、「話者」が32%、「家族以外」が68%となっている。レベルにかかわらず「てあげる」においては、「家族以外」のほうが「話者」より誤用率が高いことがわかる。これは「てくれる」文で、高い誤用率が示された「話者」とは異なる結果である。図5は、与え手の相違によって生じるB群（N2及び2級）の誤用を示したものである。

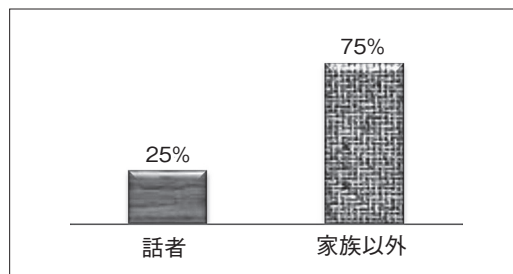


図5 与え手の相違による誤用 (B群)

図5により、与え手の相違によって生じるB群の誤用率は、「家族以外」が75%、「話者」が25%となっている。また、「家族以外」と「話者」間の誤用の差は50%であり、「家族以外」が「話者」より誤用率が高いことがわかる。図6は、与え手の相違によって生じるA群の誤用を示したものである。

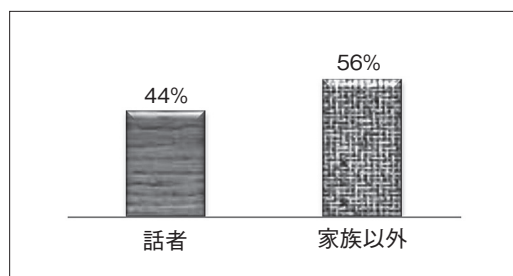


図6 与え手の相違による誤用 (A群)

図6により、レベルが高いA群の誤用は、「家族以外」が56%、「話者」が44%の割合が示された。また、「家族以外」と「話者」間の誤用率の差が、B群は50%であるのに対してA群は12%にとどまった。図5と図6を比較してみると、A群もB群も「家族以外」の誤用率が高いことがわかる。「話者」では、A群(44%)がB群(25%)より誤用が増している。「家族以外」では、B群が75%、A群が56%であることからレベルの向上にしたがって、誤用率が減っていることがわかる。

3.3 調査結果のまとめ

韓国人学習者を対象とし、アンケート調査を用いて、「てくれる」及び「てあげる」において、話し手の視点が与え手及び受け手のどちらかに置かれるかの相違が誤用を生む要因としてどのように関与しているかについて調査を行った。その結果を以下にまとめる。

「てくれる」の誤用において

- 1) レベルを問わず、「(話者)に～てくれる」のほうが「(家族)に～てくれる」と「(家族以外)に～てくれる」より誤用が多く見られた。
- 2) A群もB群も受け手が「話者」のほうが「家族」と「家族以外」より高い誤用率が示された。

- 3) 「(家族) に～てくれる」については、B群は、誤用率が0%であるが、A群は、23%と、誤用が増している。

「てあげる」の誤用において

レベルの違いを問わず、「(家族以外) が～てあげる」のほうが「(話者) が～てあげる」より誤用が多く見られた。

- 2) A群もB群も与え手が「家族以外」のほうが「話者」より高い誤用率である。
- 3) 「(話者) が～てあげる」は、B群が25%、A群が44%と、レベルの高いA群の誤用が多く見られた。
- 4) 「(家族以外) が～てあげる」は、B群が75%、A群が56%と、レベルが上がるにつれ、誤用率が減る傾向である。

4. 考察

本研究では、授受補助動詞における話し手の視点に着目し、「てくれる」及び「てあげる」文において、与え手及び受け手を「話者」、「家族以外」、「家族」の三つに設定して、その相違が誤用を生む要因としてどのように関与しているかを検討した。以上の結果から考察することとする。

4.1 課題①の考察

研究課題①については、3.1の結果より、「話者」54%、「家族」18%「家族以外」29%となっていることから、レベルを問わず「てくれる」文において、受け手の相違が誤用を生む要因として関与していることが考えられる。

まず、レベルの低いB群を見てみると、受け手が「家族」では、誤用が見られなかったものの「話者」が73%の割合が示されたことから、「話者」のほうが「家族」より誤用率が高いことがわかる。レベルの高いA群の誤用は、「家族」が23%、「家族以外」が28%とほとんど変わらないことがわかる。しかしながら、「話者」で50%の割合が示されたことから、受け手の相違が「てくれる」の誤用に関与しているようである。

韓国の授受動詞では、日本語の授受表現のように話者の視点は関係ないため「ウチ」「ソト」が絡んでくることはない(稲熊：2004：16)。これにより与え手が常に主語であれば「주다(チュダ)」を使用する韓国人日本語学習者が「てくれる」の意味を理解し、恩恵が与え手から受け手へと移動することを認識していたとしても、「てくれる」文の視点制約について理解していない可能性が十分考えられる。

4.2 課題②の考察

「てあげる」文における与え手の相違によって生じる誤用に関しては、レベルを問わず、「家族以

外」が68%、「話者」が32%という結果が示された。これは「てくれる」の高い誤用率の「話者」54%とは異なる結果である。

レベルによる誤用を比較してみると、レベルの低いB群は、「家族以外」が75%、「話者」が25%となっており、「話者」と「家族以外」間の誤用の差が50%で顕著な差が見られた。すなわち、B群の場合、「てあげる」文に関しては、与え手が「話者」より「家族以外」のほうが誤用率が高く見られ、困難であることが読み取れる。レベルの高いA群は「家族以外」が56%、「話者」が44%となっていることから、「家族以外」と「話者」間の誤用の差が少なくなっていることが明らかになった。

以上の結果から学習者が発話時、与え手が「家族以外」の場合、主語がウチ関係にあることに気づいていない可能性が高いことが考えられる。話し手の視点が「話者」の場合に関してはA群B群両方とも「家族以外」より低い結果が示された。これは、与え手が主語であれば「주다」(チュダ)を使用する韓国人日本語学習者には、「てあげる」のほうが、常に主語がソトで受け手視点をもつ「てくれる」より困難さを感じないことが考えられる。また、与え手が「家族以外」の誤用についてもA群が56%、B群75%で割合が減っており、レベルの上昇によって誤用率が低くなるという結果が示された。

おわりに

今回は、東京都内の韓国人学習者を対象に調査を行い、授受補助動詞の視点からみて、話し手の視点が与え手及び受け手のどちらに置かれるかの相違が誤用を生む要因としてどのように関与しているかを中心に考えてきた。その結果、授受補助動詞の誤用には話し手及び受け手の相違が誤用に影響を与える可能性が示された。

今後は、授受補助動詞の誤用の要因を学習者のレベルに焦点を当てて、分析を行い、学習者の日本語レベルによって生じる誤用の型及び誤用率の高い授受補助動詞と場面、文脈について、さらに被験者を増やして見ていく必要がある。

謝 辞

本研究を調査する際、東京外語専門学校の鈴木先生、李先生に大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。また、論文の執筆の際には、山下暁美先生に貴重なご指摘とご教示を賜りました。心から感謝を申し上げます。

〈注〉

- i. ローマ字変換は韓国の外来語表記法による。(国立国語院)
- ii. ハングル変換は韓国の外来語表記法による。(国立国語院)
- iii. 本稿で「ウチ」とは、話し手の家族や友達など、話し手が自分寄りの立場にあると考えている人物のことで、「ソト」はそれ以外の第三者のことを指す。
- iv. 日本語能力試験は、日本語を母語としない人の日本語能力を測定し認定する試験として、国際交流基金と日本国際教育協会(現日本国際教育支援協会)により1984年に開始された。

引用文献

- 稲熊美保 (2004) 「韓国人日本語学習者の授受表現の習得について」『国際開発研究フォーラム』26 pp.13-26
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店 p.134, p.141, pp.152-152
- 坂本正・岡田久美 (1996) 「日本語の授受動詞の習得について」『アカデミア—文学・語学編』61 南山大学 p.686
- 田窪行則 (1997) 『視点と言語行動』 くろしお出版 p.105
- 武村美和 (2011) 「中国人日本語学習者の授受動詞文理解に影響を及ぼす要因—視点制約と方向性に着目して—」『日本語教育』148号 p.129
- 尹喜貞 (2009) 『日本語学習者の授受動詞の習得に関する研究—学習環境と母語の影響について—』お茶の水女子大学大学院博士論文 pp.34-35 pp.117-118

参考文献

- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』 凡人社
- 高見健一 (2000) 「被害受身文と「～てにVしてもらう」構文—機能的分析—」東京都立大学
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ』 明治書院
- 中崎温子 (2000) 「話し手主観性と人称詞ハイアラーキー」『言語と文化』No.15 愛知大学
- 横田 隆志 (2008) 「日本語初級教材のイラストに見られる『視点』の分析」北陸大学 p.223
- 渡辺裕司会 (1993) 「授受表現における授受の方向性Ⅱ」『留学生日本語教育センター論集』 東京外国語大学
- 牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学』アルク p.70
- 榮恵仙 (2009) 『やりもらい文法』 제이앤씨
- 尹喜貞 (2004b) 「授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の習得—日本語を外国語とする韓国人日本語学習者を対象として—」『言語文化と日本語教育』第28号

参考資料

- 日本語能力試験 JLPT <http://www.jlpt.jp/> 2011年9月15日 アクセス
- 韓国国立国語院 http://www.korean.go.kr/09_new/dic/rule/rule_foreign_index.jsp 2011年9月15日
アクセス